

令和5年3月17日

福岡市政記者各位

経済観光文化局文化振興課

第53回福岡市文学賞受賞者の決定及び贈呈式の開催について

令和4年度福岡市文学賞の受賞者が決定しました。贈呈式を下記のとおり行いますのでお知らせいたします。ぜひ、取材いただきますよう、よろしくお願いいたします。

福岡市文学賞

福岡市において文学活動が続ける作家の中から、近年において特に優れた功績をあげた個人を表彰することにより、受賞者のさらなる文学活動の充実・発展につなげるとともに、市民が優れた文学作品にふれる機会を作り、福岡市の文学の普及と振興を図ります。

【制度創設】昭和45年度（今年で第53回目）

【受賞者累計】296名（令和3年度まで）

【受賞基準】本市または福岡都市圏に居住し、優れた著書の出版、もしくは、優れた作品を継続的に発表するなど、近年顕著な文学創作活動を行ったと認められる個人（過去において文学賞を受賞した者を除く。）

第53回受賞者

【小説】 あづま よしと
東 義人

【俳句】 くまがえ ほうざん
熊谷 蓬山

【詩】 かるべ まさひろ

【川柳】 ひらもと こ
平本 つね子

【短歌】 こやま じゅんこ
小山 純子

■ 贈呈式

日時 令和5年3月25日（土）13時～

場所 福岡アジア美術館あじびホール（福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル8階）

■ 記念作品集の刊行

受賞者の作品を収録した「記念作品集」を、4月上旬以降に福岡市総合図書館と各分館で貸し出します。（情報プラザ等でも閲覧可）

■ 添付資料

別紙1）第53回福岡市文学賞の受賞者について

別紙2）第53回福岡市文学賞選考経過

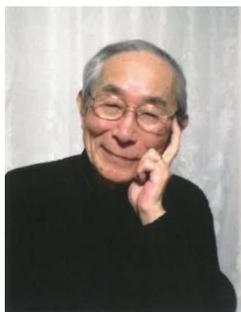
別紙3）受賞者調書

【問い合わせ先】

経済観光文化局文化振興課 横溝

（電話：092-711-4664 内線1801）

令和4年度（第53回）福岡市文学賞の受賞者について（敬称略）



○東 義人（あづま よしと） 【小説（エッセイ）】

昭和11年広島県福山市生まれ。昭和34年に早稲田大学ドイツ文学科卒業後、RKB毎日放送入社。平成6年に早良美術館るうゑを創立、今日に至る。

【著書】

詩集『自由時間』（平成3年）、句集『日常』（平成8年）、『わたしの香月泰男ノート』（平成8年）、『ふくおか わが町わが舞台』（平成10年）、『地域演劇という不思議空間』（平成20年）、『途方に暮れて ひと・こと・ところ五十年』（平成22年）、『東風（こち）吹かば』（令和3年）



○かるべ まさひろ 【詩】

平成3年東京都生まれ。平成25年に東京芸術大学卒業後、平成27年に福岡へ移住。令和2年の著書『Access アクセス』にて、第56回福岡県詩人賞を受賞。

【著書】

詩集『Access アクセス』（令和2年）



○小山 純子（こやま じゅんこ） 【短歌】

昭和28年大分県日田市生まれ。昭和51年に広島大学教育学部卒業後、8年間福岡市立小学校教諭として勤務。平成24年に朔日短歌会入会し、令和4年歌集『河のそびら』上梓

【著書】

歌集『河のそびら』（令和4年）



○熊谷 蓬山（くまがえ ほうざん） 【俳句】

昭和21年生まれ。平成14年に職場同好会にて作句を開始し、平成19年「未来図」入会。鍵和田袖子に師事。令和3年「天晴」入会、津久井紀代に師事し、現在、公益社団法人俳人協会会員。

【著書】

第一句集『玉せせり』上梓（平成28年）

第二句集『数珠子』上梓（令和4年）



○平本 つね子（ひらもと つねこ） 【川柳】

昭和19年生まれ。平成20年に川柳楠の会入会、平成23年に番傘川柳本社の誌友となり、平成25年に福岡市市民文芸川柳部門大賞受賞。令和4年より福岡県川柳協会事務局担当。

【著書】

句集「花吹雪」上梓（令和4年）

令和4年度（第53回）福岡市文学賞選考経過

福岡市文学賞選考委員会

【小説部門】

「同人誌でこつこつと励んでいる人に」と、選考に臨んで、毎回、委員の誰もが真っ先に口にするのはこの言葉である。

しかし、ここ数年、言葉通りにはならない。この作品は、と思う作者の殆どが過去の受賞者である。

同人が育ってきていないということなのだろうか。この点についてはもっと論じられる必要があるだろう。

そんな中で、「照葉樹」の藤代成実氏の名が挙がった。注目されていた連載中の「一族の終わり」が完結したからだ。昨年度は、連載中ということで、見送りになったいきさつがある。期待されている作者である。その他、二、三の同人誌関係者の名が挙がったが、いずれも、もう一歩というところで、推薦とはならなかった。単行本では、これも昨年度の候補であった馬場明子氏のドキュメンタリー『傷ついたマリア』も出たが、新しい作品を見てということになった。

結局、過去に一度も候補に挙がっていないが、東義人氏を推薦することになった。元RKBテレビ局のディレクターである。局の看板作品であった「東芝日曜劇場」、「窓をあけて九州」等の制作をされてこられた。退職後、「早良美術館るうゑ」を開設、30年近くになる現在も「るうゑ」ファンが早良まで足を運んでいる。職業がら、また絵画や演劇の趣味を通して得られた多くの知己友人との交流のさまを、折りに触れて著書や冊子等に発表し、我々読者にも共有させ楽しませてくれている。15点の著書をお持ちだが、句集、画集、エッセイ、評論等、多岐に亘っている。多彩、多才な人である。

推薦書籍である令和3年、花書院刊『東風吹かば』の内容を、「文学、美術、地域文化・・・」とご自身述べられているが、確かに、それらを俯瞰・堪能することができる優れたエッセイ集である。福岡市に対する氏の文化活動の貢献も併せて、全委員一致の推薦である。

【詩部門】

今回の選考該当期間中（令和3年11月1日から4年10月30日）に発行され、既受賞者を除き選考委員が確認した詩集は以下の通りである。橋口久美『三十六・五度』（幻冬舎MC2022年3月2日）、岡本哲史『犬』（花乱社2022年5月16日）、かるべまさひろ『ハイパーファミリー』（私家版2022年10月23日）、竹中優子『冬が終わるとき』（思潮社2022年10月31日）。

このうち竹中詩集は、昨年福岡市文学賞を短歌部門にて受賞しているため、今回は対象外とした。選考は、まず各委員が推薦する詩集をそれぞれ挙げることから始まった。その結果、全委員が一致してかるべの詩集を挙げたため、それぞれの推薦理由を含めて討議した。

詩集『ハイパーファミリー』は、「家族」のイメージの変容を詩のことばによって探究する意欲的な詩集である。「乾いた全てのプラスチックに僕の足跡が残るたび、なんでもない人間になれた」（「プレップ」より）などの「行」に、現代人が抱える「生きづらさ」と向き合い、自らの身体を通して詩を社会に開いていこうとする姿勢が見られる。

また、行空きや文字がグラフィックに配置されたレイアウトは楽譜のようであり、音楽性に溢れている。前回の詩集は、実験性が前景化しすぎていたが、今回は適度にそれが抑制され、読む側にとって親しみやすい構成になっている。作品によってはタイトルがなく、いきなり詩行がはじまるという仕掛けも効果的である。

今回の詩集には既視感を伴う箇所も見られたが、「違う詩にしようよ/博物館の幕間でフィルム/巻きながら/形容詞のない顔を見た」（「鐘」より）という箇所に注目した。「形容詞のない顔」とは、レトリック偏重になりがちな現代詩への反抗のようにも受け止められる。文学的なものだけに偏らない具体的な「個」を表現の中に組み込んでいる点を高く評価した。

「ユリイカ」などへの投稿や年1冊ペースでの詩集刊行、近年の活動も併せて、今年度はかるべの受賞が決定した。

【短歌部門】

本年度刊行の歌集は小山純子『河のそびら』（角川文化振興財団）、田上義洋『ひともじのぐるぐる』（六花書林）の二冊。ここに昨年度選考にのらなかった矢野梯子『沢瀉』（文學の森）、惜しくも受賞を逃した巻桔梗『神籬の森』（権歌書房）の二冊を加え慎重に討議したところ、小山純子『河のそびら』に決定した。

小山純子氏は、春日市在住。二〇一二年、朔日短歌会入会。本歌集は第一歌集である。古典から現代まで幅広いうたに学びながら、そこに、氏ならではの「詩」を立ち上げていこうとする、意欲溢れる一冊である。

- ・戦場に子が立たぬ国いつまでもつづけと願ふ熱き八月
- ・ああ夫よよろこびたまげ薩摩より桜鯛とどく友の釣りしとぞ
- ・駆けだして転びさうなる母の文字 もういいかなあ 母をやめても
- ・わづかにも荒ぶる熱をのこしつつ筑後川ながる初秋の海へ

身近にとどまらず、社会や歴史、風土へも大きく踏み込んでうたう。一首目の願いは平凡だが、いまの世界情勢のなかでは、ことに重たく響く。二首目は夫の退院祝いにとどいた友からの品。思いの溢れる一首で、こうした家族のうたにも魅力がある。三首目、子育てを終えて、それでも「母」という時間はつづく。ふとこぼれた呟きだが、現代における家族のすがたを照らし出す。四首目、筑後川の夏のゆたかなる流れ、その名残の「熱」をうつくしく描いた。

一冊を統べる主題や独自の文体、一首の滞空時間など、課題はいくらか残るが、一首の完成度に加え、一冊にあらわれた感性と意気込みとが評価された。

- ・馬に乗る埴輪の人がよみがへる落ち葉踏みゆく冬の夕暮れ 田上義洋『ひともじのぐるぐる』
- ・鳳仙花に爪を染めにし井戸端のつるべのなごりの錆をかなしぶ 矢野梯子『沢瀉』
- ・読むちから辛うじてあるといふ友に話しことばの手紙を書きぬ 巻桔梗『神籬の森』

さらっとしたうたい口におもしろい切り口を見せる田上氏。静謐な文体に、暮らしぶりや人柄の沁みる矢野氏。自然体でうたいながら、印象深いうたをほつほつと置く巻氏。1冊としての魅力・個性はいずれにも確かにありながら、一首の強靭さ、その力量、あるいはうたとしての魅力においてはひとつ抜けていた。

【俳句部門】

新型コロナウイルス感染症の蔓延にも拘わらず、本年度は昨年よりやや多くの句集が出版されたのは嬉しい兆候であった。中でもまず、挙げておくべきは阿比留初見「冬野」名誉主宰の『波濤』の上梓を見たことである。

沖を見て風の色見て丘の秋
腹擦つて鶴鴿湖を渡りきる

などの秀吟をふくむ本句集は福岡市文学賞の候補にもっとも相応しいものだが、著者自身が選考委員であるため辞退された。

最終候補として残ったものは、著者五十音順に、安徳由美子『蓮の糸』、池田謙児『菩薩似』、江副史湖『花檸檬』、熊谷蓬山『数珠子』の四冊で一冊ずつ具に検討を行った。

安徳由美子『蓮の糸』

感性の鋭さに裏打ちされた第三句集。写生を中心の、いわゆる描写力を恃みとせず、むしろ、象徴詩としての表現を俳句の上で具現化しようとする姿勢が窺える。

ひこばえぬそのしばらくをきれいな雨
冬麗や灘に集まりたる光

池田謙児『菩薩似』

「光円」に入会后、約十年間の俳句をまとめた第一句集。それ故、まだ俳句としての骨格の脆弱なものも混在しはするが第一句集ならではの新鮮味のある作品に好感が持てる。なかでも肉親を詠んだ句に特徴がある。

ポインセチア見ながら妻は返事せり
勝ち鬨のごとき産声桃の花

江副史湖『花檸檬』

「卑弥呼」を主宰する著者の第一句集。母より結社を継承したが、その姿勢もいささかも揺らぐことなくあくまでも写生を主軸とした輪郭の明確な作品が多かった。

縮緬の豆雛を縫ふ佳き日なり
春光を浴びに野に出よ乙女らよ

熊谷蓬山『数珠子』

「未来図」で鍵和田袖子に長く師事した第二句集。師風をよく受け継ぎ徒に新味を追うことはなく根底にしっかりとした写生を据えつつ滑稽味も忘れておらず多彩である。

暮れ初めて気合の入る一の酉
押し競饅頭家は代々隠れ耶蘇
掛取りの言葉だんだんぞんざいに

以上、長時間に亘り論議を重ねた結果、『数珠子』が一頭地抜けているとの結論に達し全員一致で受賞に決定した。

【川柳部門】

今年度も例年通りこれまでの文学賞受賞者の方々のアンケートを取った。

大多数は平本つね子推薦、その他は白紙だった。「句集 花吹雪」(新葉館) 令和4年秋の出版が大きな決め手となった。

川柳界もこの3年コロナ禍のため各地の大会は殆ど投句となり、例会・勉強会も時たまとなり、久しぶり！お元気！という日頃となっています。今更ながら川柳とは座のもの！という感を強くする。

平本つね子氏は平成20年楠の会・いこいグループに入会され、会の中心的な支えの存在となられた。平成23年より川柳番傘本社読友として佳吟の投句を続け、平成28年5月号十巻頭に、常に読友1ページ目を飾られ、平成30年第3回番傘賞に選ばれ、本社に招待され、受賞された。

それを機に、番傘本社同人に推薦され、令和元年7月号巻頭の栄に。地元福岡の大会の出席、選者として活躍をされている。

去る家の壁に残した釘の跡
半落ちの浅利寝たふり死んだふり
過ぎ去ったあれは日本の絶頂期
まだ生きる生きて見せると再生紙
硝子拭く春がきれいに見えるよう
人形になれず日蓮にもなれず
孤独死の傍らに転がる缶ビール
散り際は舞ってゆきたい花のまま

彼女の作風は、平常の暮らしのワンシーンを切り取り、誰にも納得の出来る真髓を掴まれている。

本社受賞式にはご夫妻でのご参加、看護のお勤めで身に付けられたやさしさ、日常の目配り・気配り、柔和な笑顔。そして印刷の仕事を終えられた今、夫婦支えあい、娘さん等の理解と的確なアシストを受けながら、日々川柳に精進されている。

今後ともご家庭を大切に、いっそうの佳句の発露を、そして柳界のお力を貸して頂けるようご活躍を期待し、推薦する。

福岡市文学賞選考委員 (部門別／敬称略)

【小説】坂口博	【詩】龍秀美	【短歌】桜川冴子	【俳句】野中亮介	【川柳】植村克志
鈴木比嗟子	吉貝甚蔵	藤野早苗	松岡耕作	富永紗智子
井手俊作	松本秀文	山下翔	阿比留初見	山口由利子

受賞者調書

部門	小説（評論）
氏名	東 義人（あづま よしと）
住所	福岡市早良区
略歴・著書	<p>昭和11年 広島県福山市生まれ。 昭和34年 早稲田大学ドイツ文学科卒業後、RKB毎日放送入社。 平成8年 定年退職。 平成6年 早良美術館るゝを創立、今日に至る。</p> <p>著書には、句集・詩集・スケッチ集も多数あるが、絵画・演劇に関するエッセイ集を刊行。主な著書は以下のとおり。 詩集『自由時間』（裏山書房、平成3年7月） 句集『日常』（天籟俳句会、平成8年） 『わたしの香月泰男ノート』（海鳥社、平成8年7月） 『ふくおか わが町わが舞台』（福岡経営企画、平成10年4月） 『地域演劇という不思議空間』（書肆侃侃房、平成20年5月） 『途方に暮れて ひと・こと・ところ五十年』（梓書院、平成22年4月） 『東風(こち)吹かば』（花書院、令和3年12月）</p>
受賞理由	<p>RKB毎日放送でTV番組ディレクターを長年勤め、主にドラマ作品を手がけた経験を生かした演劇評や、番組作成を通して知見を深めた絵画に関するエッセイは、作者のほかには表現できない独自性を持ったものである。近作の『東風吹かば』では、生地・福山ゆかりの小説家・井伏鱒二や檀一雄・野呂邦暢、画家の香月泰男・野見山暁治などにも触れる。自伝的文章や資料も充実していて、著者の全体像を知ることができる。文学的業績は多岐にわたるが、ことに福岡の演劇界への貢献には顕著なものがあり、本年度の小説（評論）部門の候補者として推薦する。</p>

受賞者調書

部門	詩
氏名	かるべ まさひろ (かるべ まさひろ)
住所	福岡市博多区
略歴 ・ 著書	平成3年 東京都出身。 平成25年 東京芸術大学卒業。 平成27年 福岡へ移住。 令和2年 著書『Access アクセス』(2019)にて、第56回福岡県詩人賞を受賞。
受賞理由	上梓した詩集『ハイパーファミリー』は、技術、内容共に秀でたものであった。「家族」のイメージの変容を詩のことばによって探究する意欲的な詩集である。荒削りな点もあるが、現代人が抱える「生きづらさ」と向き合い、自らの身体を通して詩を社会に開いていこうとする姿勢は評価に値する。「ユリイカ」などへの投稿や年1冊ペースでの詩集刊行、近年の活動も併せて、推薦する。

受賞者調書

部門	短歌
氏名	小山 純子（こやま じゅんこ）
住所	春日市
略歴 ・ 著書	<p>昭和28年6月 大分県日田市生</p> <p>昭和51年3月 広島大学教育学部卒</p> <p>卒業後8年間福岡市立小学校教諭</p> <p>平成24年6月 朔日短歌会入会</p> <p>令和4年6月 歌集『河のそびら』上梓</p> <p>昭和52年 福岡市教育論文優秀賞 「文脈の中で言葉の意味を考え生み出す読みの指導」</p>
受賞理由	<p>本歌集『河のそびら』は、平成23年の東日本大地震に取材した作品で始まる。災害復興の一助となれば、との思いで働く日々を詠んだ作品は激情に流されず、抑制の効いた静謐さに満ちている。自身の視座を大事にした時事詠には信頼を置ける。</p> <p>家族や産土に注ぐ眼差しは柔らかく、けれどその中にある複雑な心情の吐露は読者の共感を呼ぶ。</p> <p>駆けだして転びさうなる母の文字 もういいかなあ母をやめても</p> <p>印象に残った一首。本賞受賞が、作歌歴10年の作者に新たな世界を展くことを祈念して推薦する。</p>

受賞者調書

部門	俳句
氏名	熊谷 蓬山 (くまがえ ほうざん)
住所	福岡市城南区
略歴 ・ 著書	<p>平成14年 (財)工業所有権協力センターの職場同好会にて作句開始</p> <p>平成19年 「未来図」入会 鍵和田柚子に師事</p> <p>平成28年 第一句集『玉せせり』上梓 (本阿弥書店)</p> <p>令和2年 「花鶏」入会 野中亮介に師事</p> <p>令和3年 「天晴」入会 津久井紀代に師事</p> <p>令和4年 第二句集『数珠子』上梓 (ふらんす堂)</p> <p>現在 公益社団法人俳人協会会員</p>
受賞理由	<p>俳人協会賞、詩歌文学館賞受賞者の鍵和田柚子に初学より師事し、その鉄槌を受けただけあり、作風は徒に新味を追うことはなく、「天領の名残の土蔵桐一葉」「暮れ初めて気合の入る一の酉」「直立の太藺隙なし鷗外忌」のように句の根底にしっかりとした写生を据えつつ、「押し競饅頭家は代々隠れ耶蘇」「掛取りの言葉だんだんぞんざいに」のごとき滑稽味も忘れない。今後、更なる進展が望めるため、本賞に推薦する。</p>

受賞者調書

部門	川柳
氏名	平本 つね子 (ひらもと つねこ)
住所	福岡市南区
略歴 ・ 著書	平成20年9月 川柳楠の会 入会 平成21年9月 川柳いこいのグループ入会 平成23年2月 番傘川柳本社 誌友 平成25年 福岡市市民文芸川柳部門大賞受賞 平成30年1月 第3回番傘賞受賞 平成30年9月 番傘川柳本社 同人 令和4年より 福岡県川柳協会事務局 担当
受賞理由	令和4年11月 川柳句集「花吹雪」上梓。 「川柳を始めた事により心の扉を開く事が上手になっ た・・・」と句集あとがきにある通り、飾らないお人柄で所 属川柳グループの会計その他要所を長年支えておられる。さ らに新しい役職を引き受けられ、ますます川柳発展のため力 を發揮される事と大いに期待して推薦する。